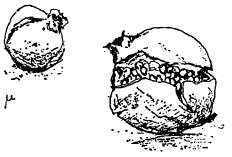

巻頭言

光に関する理学・工学・産業

佐柳和男*

光学懇話会が創立以来カバーしてきた領域は，人によって違った考えもあるとは思うが，応用光学あるいは光学技術と呼ばれるものであったと思う．応用物理学会の分科会の一つであること，創立期が日本の光学機械産業の国際的な進出の気運にあったこともあり，実際にはわが国で産業として盛んなカメラを中心とした光学機械に偏していた．

対象となる産業分野がわりあい明確であったため，その技術分野としてはまとまって深化してゆく方向で，それなりの役目を果してきたと思う．産業はもともと複合技術であり，光学機械という講義は精密機械学科の重要なものであった例からもわかるように，産業の立場からみた応用光学は光学懇話会の独占物ではなかった．その他，分光学会とか写真学会など，いくつかの学会とはそれぞれの成り立ちの歴史の中で諒解された，また時間的にはスパンの長い関係でうまく運用されてきたといえる．

最近の光工学あるいは光技術と呼ばれる世の中の動きは，従来やってきたパターンに慣れてきた人々にとっては，対応に戸惑う事態であると思う．会員相互間でも，これといった共通の考えがあるとは限らない．教育上の背景，属している研究機関，産業あるいは企業のもつベクトル，そして現在やっている研究・開発業務等により，以前には考えられなかった幅での異なった事情のなかで考え，判断せざるをえず，結果としては非常にばらばらなものになっているのが現状であろう．

いま，光学懇話会にとって大切なことは，応用光学がこれだけ多くの産業分野に関係している現状を正確に理解し，さらに将来の良い展開までを目指して，光に関する理学・工学・産業の構造図式を作りあげ，そのなかでの懇話会の位置づけをすることである．現在光技術と呼ばれる分野に積極的な他の学・協会は，どちらかというと複合技術に関するものであり，また特定の産業や企業群と結んでいる場合が多い．

光学懇話会はそういったなかで，光学を諸分野に応用してゆくうえでの基礎あるいは理論や基礎に支えられた応用についてのリーダーシップをとれるような思想の確立と実行をすべきではないかと考えている．会員諸兄の考察と力の結集を祈っている．

* (株)写研 写研メディア研究所　〒351-01 和光市新倉 2-27-63